



平成17年3月期

決算短信 (連結)

平成17年5月20日

上場会社名 日本風力開発株式会社  
 コード番号 2766  
 (URL <http://www.jwd.co.jp/>)

上場取引所 東証マザーズ  
 本社所在都道府県 東京都

代表者 役職名 代表取締役社長 氏名 塚脇 正幸  
 問合せ先責任者 役職名 代表取締役副社長 氏名 大内 勝樹 TEL (03) 3519-7250  
 決算取締役会開催日 平成17年5月20日  
 米国会計基準採用の有無 無

1. 平成17年3月期の連結業績 (平成16年4月1日～平成17年3月31日)

(1) 連結経営成績 (注) 記載金額は百万円未満は切り捨てて表示しております。

	売上高		営業利益		経常利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%
17年3月期	5,827	19.6	730	81.3	504	△20.1
16年3月期	4,872	19.8	402	107.6	631	271.4

	当期純利益		1株当たり 当期純利益		潜在株式調整後 1株当たり当期純利益		株主資本 当期純利益率		総資本 経常利益率		売上高 経常利益率	
	百万円	%	円	銭	円	銭	%	%	%	%		
17年3月期	273	△23.9	3,092	34	3,030	27	5.0	3.1	8.7			
16年3月期	359	277.2	4,830	84	4,777	27	13.0	6.4	13.0			

(注) ①持分法投資損益 17年3月期 △1百万円 16年3月期 △4百万円  
 ②期中平均株式数(連結) 17年3月期 88,428株 16年3月期 74,373株  
 ③会計処理の方法の変更 無  
 ④売上高、営業利益、経常利益、当期純利益におけるパーセント表示は、対前期増減率であります。

(2) 連結財政状態

	総資産		株主資本		株主資本比率		1株当たり株主資本	
	百万円		百万円		%	円	銭	
17年3月期	19,663		7,037		35.8	72,650	73	
16年3月期	13,462		3,921		29.1	48,493	55	

(注) 期末発行済株式数(連結) 17年3月期 96,874株 16年3月期 80,874株

(3) 連結キャッシュ・フローの状況

	営業活動による キャッシュ・フロー	投資活動による キャッシュ・フロー	財務活動による キャッシュ・フロー	現金及び現金同等物 期末残高
	百万円	百万円	百万円	百万円
17年3月期	△1,258	△4,103	6,183	3,469
16年3月期	435	△4,990	6,067	2,621

(4) 連結の範囲及び持分法の適用に関する事項

連結子会社数 17社 持分法適用非連結子会社数 0社 持分法適用関連会社数 1社

(5) 連結範囲及び持分法の適用の異動状況

連結(新規) 4社(除外) 0社 持分法(新規) 0社(除外) 0社

2. 平成18年3月期の連結業績予想 (平成17年4月1日～平成18年3月31日)

	売上高		経常利益		当期純利益	
	百万円		百万円		百万円	
中間期	1,000		△340		△210	
通期	7,300		660		380	

(参考) 1株当たり予想当期純利益(通期) 3,922円62銭

※ 上記に記載した予想数値は、現時点で入手可能な情報に基づき判断した見通しであり、多分に不確定な要素を含んでおります。実際の業績等は、業況の変化等により、上記予想数値と異なる場合があります。  
 なお、上記予想に関する事項は添付資料の8ページを参照して下さい。

# 1. 企業集団の状況

## (1) 企業集団の概況

当社グループ（当社及び当社の関係会社）は、当社（日本風力開発株式会社）、子会社17社及び関連会社2社により形成されております。

当社グループは、風力発電機の輸入・販売、ウィンドファームの開発、当社グループが開発を行った風力発電事業への出資と運営等の事業を展開しております。具体的には下記3事業に分類されます。

### ① 風力発電機の販売

当社はドイツのGE ウィンドエナジー社製風力発電機（1,500kWタイプ）の輸入販売を行っております。

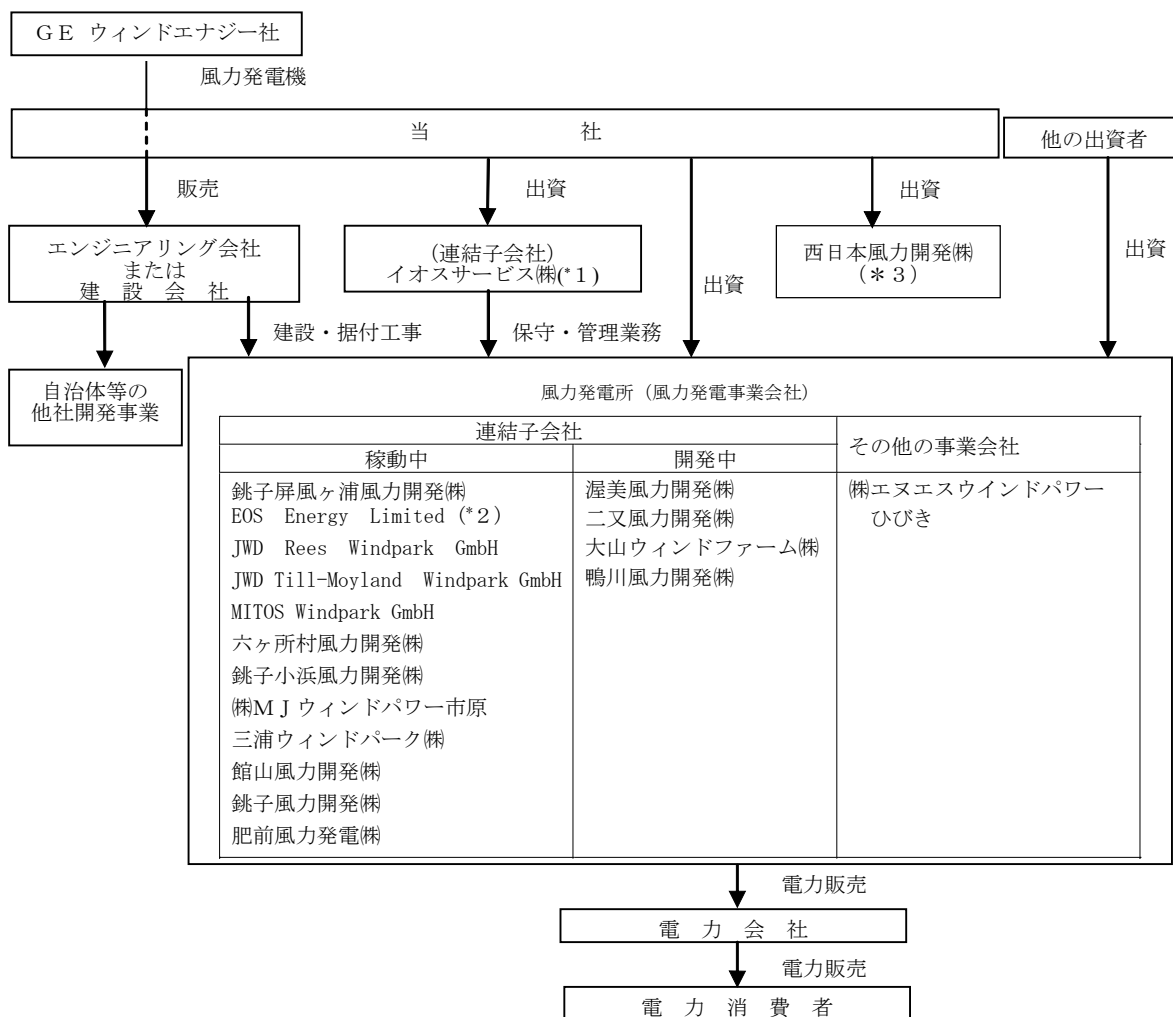
### ② 風力発電による売電

本邦においては銚子屏風ヶ浦風力開発(株)、六ヶ所村風力開発(株)、銚子小浜風力開発(株)、(株)MJウィンドパワー市原、銚子風力開発(株)、館山風力開発(株)、三浦ウィンドパーク(株)ならびに肥前風力発電(株)の計8社、海外においてはJWD Rees Windpark GmbH、JWD Till-Moyland Windpark GmbHならびにMITOS Windpark GmbH計3社、合計11社による売電収入であります。尚、全て当社連結子会社であります。

### ③ 業務受託等

当社が行うウィンドファームの開発及び運営に係る業務受託収入等であります。

## (2) 企業集団の事業系統図



上記の他に持分法を適用していない関連会社である(株)アイピーピーがあります。同社は自然エネルギー発電のコンサルティングを主な業務とする会社であります。

- \* 1 イオスサービス㈱は、ウィンドファームの保守・管理業務の受託を目的とした会社であり、風力発電による売電事業を行っている当社連結子会社と業務委託契約を締結しております。
- \* 2 EOS Energy Limitedは、JWD Rees Windpark GmbH、JWD Till-Moyland Windpark GmbHならびにMITOS Windpark GmbHの純粋持株会社であります。
- \* 3 西日本風力開発㈱は、九州地区における風力発電所開発を加速化する為に、西日本プラント工業㈱と共同出資で設立した持分法適用会社であります。

## 2. 経営方針

### (1) 経営基本方針

当社は、「風力資源の開発」の分野で、「業界のパイオニア」として市場拡大に尽力し、「地元との共生を目指した風力発電事業」を実現することを企業理念としております。

風力発電事業は、「風力」という再生可能な自然エネルギーを商業的に電力に変換する事業であります。化石エネルギー資源を燃料とする発電と異なり二酸化炭素を発生しないため、地球規模での環境問題が深刻化し、地球温暖化防止のための二酸化炭素の排出削減が世界的な関心事となりつつある中で、大きな注目を浴びている発電方法であります。

特に、気象変動枠組条約第三回締約国会議において採択された「京都議定書」が平成17年2月に発効となり、自然エネルギーを利用した風力発電の導入が従来以上に促進されると思われま。

このような環境の中で、当社は、大規模な風力発電所を開発する「開発事業」から、風力発電機の「輸入販売業」、風力発電所の運営管理を行う「保守・運営管理業」及び風力発電所へ投資して収益を得る「投資事業」と風力発電に係わるすべての事業を行うことにより、当業界でのリーディングカンパニーを目指していくことを基本方針としております。

### (2) 利益配分に関する基本方針

当期につきましては、平成17年3月31日現在の株主の皆様に対して、平成17年6月27日開催予定の第6回定時株主総会において、1株当たり1,200円の普通配当の実施を付議させて頂く予定であります（その場合の配当性向は29%です）。

これは当社連結、単体とも3期連続して収支が黒字計上となり一定の利益が積みあがったこと、当社連結子会社の風力発電所の設備容量も当期末において72,150kWとなり今後安定した収益が見込めることならびに稼動した風力発電所も概ね順調であり収益も積みあがりつつあることから、取締役会において上記事項が決議となりました。

なお、今後については、従来以上に積極的に風力発電所建設を行う計画であることから、風力発電所建設に必要な設備資金と風力発電事業における収支のバランスを勘案し、内部留保ならびに利益配当を決定していく方針であります。

### (3) 投資単位引下げに関する考え方及び方針等

投資単位の引下げについては、株式の流動性を保つためにも必要な施策であると考えております。

今後は、株価の推移、売買の出来高および株主数に注視し、株式の流動性を勘案し随時検討を行っていく方針であります。

### (4) 目標とする経営指標について

当社グループの目標とする経営指標については、数年以内にROEを10%台、ROAを3%台へ向上させることとしております。風力発電所の建設を積極的に行うために、当社には当面旺盛な資金ニーズが発生します。内部留保の再投資と株式市場からの資金調達を基本としますので、内部留保による再投資が増加するにつれて当社のROE、ROAを増加させることが出来ます。

平成17年3月期の当社グループにおけるROEは5.0%、ROAは3.1%であり前期数値を下回りました。これは、前期運転開始した風力発電所の収益が着実に増加しましたが、平成16年10月に実施した公募増資による資本金の増加ならびに大型風力発電所が当下半年期において完成したことによる固定資産の増加となったことにより、各数値が下回ったものであります。

今後においては、当期に運転開始した風力発電所の収益が通期で寄与すること、ならびに公募増資にて調達した資金が今後開発、建設を行う風力発電所の設備資金となり、風力発電所の運転開始後の利益を積み上げることで、当該目標値を達成する計画であります。

#### (5) 中長期的経営戦略

中長期的な当社の戦略として、当社の継続的な発展を担保し、競合他社との差別化の普遍的な要素である「好立地の開拓」に、当面の間、当社の経営資源を集中して投入する考えであります。好立地の開拓の加速化、および地域的分散を勘案し、全国各地で同時並行的に開発行為を展開する必要があるため、国内の拠点展開を積極的に行う予定であります。又、地域の有力企業とのアライアンスの展開を行い開発力を今まで以上にスピードアップさせる予定であります。

大型風力発電所を効率的に開発していくために、「プロジェクトマネジメント」、「風力発電所の保守・管理マネジメント」及び「ファイナンスマネジメント」に関するスキルと人材の強化を引き続き行っていく考えであります。特に今後は、大型風力発電所開発が各地で同時に進行し、かつ稼動する風力発電所も増加致しますので、上記業務は、当社にとって従来以上に重要なポジションとなるためです。

なお、中長期的経営戦略の一部として下記事項について実行いたしました。

##### ①地域有力企業のアライアンス

千葉県鴨川市における風力発電事業の開発を行うために設立した鴨川風力開発(株)、ならびに鳥取県大山町における風力発電事業の開発を行うために設立した大山ウィンドファーム(株)への地場企業の資本参加。

##### ②人材の確保、育成

大型風力発電所が随時完成していく中で、運転開始後の風力発電所の保守管理業務を行う人材の確保に注力し、当社で採用し、イオスサービス(株) (当社連結子会社) へ出向としました。その結果、平成17年3月末現在、当社グループの従業員は48名 (前期比5名の増加)、当社従業員数は33名 (前期末比1名の減少) となっております。

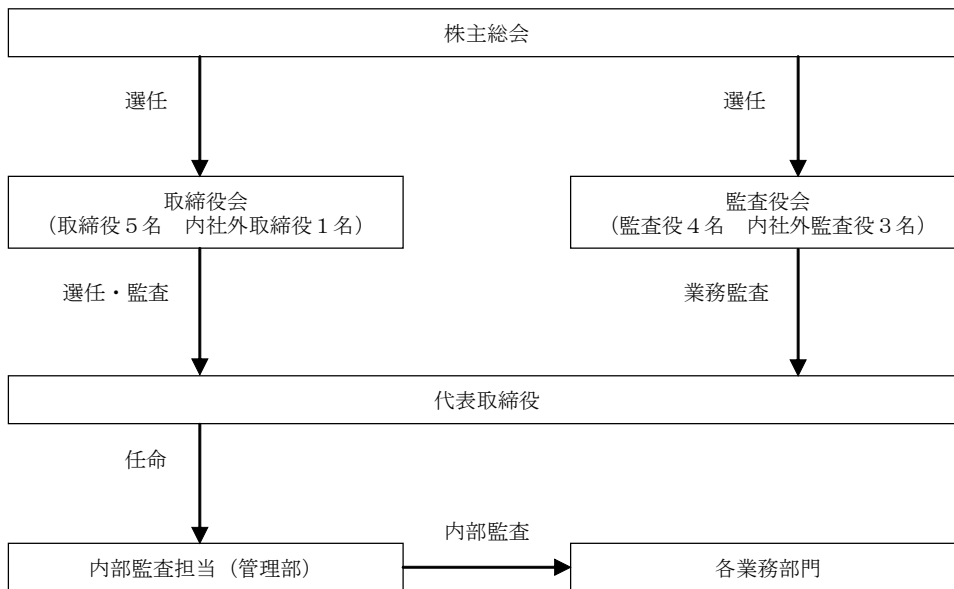
#### (6) 会社の対処すべき課題

風力発電所の開発にあたっては、最適な立地の確保が最も重要であり、これを推進することが当社グループの当面注力すべき課題であります。当期においても人員の増強を行いました。今後においても更なる優秀な人材の確保、全国各地において同時並行して適地の開発を行うための国内拠点の拡充が必要であると判断しております。

特に、人材の確保については、全国各地において大型風力発電所が運転を開始していることから、風力発電所の保守管理業務について高度な専門知識を持つ人材の確保、育成ならびに大型風力発電所を全国同時並行し開発、建設するためにプロジェクト開発を円滑に行うためのプロジェクトマネジメント業務を行う人材の確保、育成を集中的に行っていきたいと思っております。

#### (7) コーポレート・ガバナンスに関する施策の実施状況

当社グループのコーポレートガバナンス体制を示した概要図は下記の通りであります。



当社のコーポレートガバナンス施策として、①定例取締役会の開催、②監査役会の開催、③タイムリーディスクロージャーの3つの柱があります。

##### ①定例取締役会の開催

当社の取締役会は、現在取締役5名（内社外取締役1名）によって開催されております。取締役会は毎月1回定例開催されております。加えて、同メンバーにて毎週経営会議も開催しており、経営陣の間で市場環境の変化と当社ポジションと課題に対する認識を常に共有し、迅速な経営判断ができる体制としております。

##### ②監査役会の開催

当社の監査役は、常勤監査役1名、非常勤監査役3名（内社外監査役3名）の監査役で構成されております。なお、当期において監査体制の一層の充実を図るために、監査役を1名増員いたしました。

監査役も取締役会には出席しており、取締役会への監査機能は図られており、又、監査役会も定期的開催されており、十分な監査体制がとられております。

##### ③タイムリーディスクロージャーについて

タイムリーディスクロージャーについては、専門の部署を配置しており、会社説明会、適時開示、及び機関投資家やアナリストへの個別ミーティングも随時開催しております。今後も当社グループの事業展開、及び経営成績については迅速、正確かつ積極的なディスクロージャーを行う予定であります。

なお、当社と社外取締役、及び社外監査役との間において、人的関係、資本的関係、及び取引関係はありません。

#### (8) 親会社等に関する事項

該当事項はありません。

#### (9) 関連当事者との関係に関する基本方針

該当事項はありません。

### 3. 経営成績及び財政状態について

#### (1) 経営成績

##### 当期の経営成績

当期におけるわが国の経済は、依然として原油価格の高騰といった不透明感もありますが、企業収益の大幅な回復、雇用環境の若干の回復も見られ、緩やかではありますが経済全体に回復基調が見られます。

風力発電事業全体においては、平成17年3月末の日本国内における風力発電設備の設備容量は、単年度で約25万kW増加し約93万kWとなり順調に普及しております（出所：独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構）。又、気象変動枠組条約第三回締約国会議で採択された「京都議定書」も平成17年2月に発効となり、風力発電の導入が従来以上に一層促進され、当社としてのビジネスチャンスは更に拡大すると予想しております。

このような情勢の中で、当連結会計年度における開発案件として、当社グループは主に下記事項に注力いたしました。

- ① 神奈川県三浦市に三浦ウィンドパーク(株)（当社連結子会社）を設立し、風力発電所の買収を行いました（400kWタイプ2基）。
- ② 当社グループとして初の中国地方での風力発電所の開発を行い、大山ウィンドファーム(株)（当社連結子会社）を設立しました。
- ③ 千葉県鴨川市における風力発電所の開発を行うために、鴨川風力開発(株)（当社連結子会社）を設立しました。

当連結会計年度における建設案件としましては、下記風力発電所が完成しました。

- ① 平成16年10月 館山風力開発(株)完成（設備容量：1,500kW）
- ② 平成16年11月 六ヶ所村風力開発(株)（拡張分）完成（設備容量：2,850kW）
- ③ 平成16年11月 銚子風力開発(株)完成（設備容量：13,500kW）
- ④ 平成16年12月 MITOS Windpark GmbH完成（設備容量：3,000kW）
- ⑤ 平成17年3月 肥前風力発電(株)完成（設備容量：12,000kW）

この結果、売電収入においては、当社連結子会社計11社（当連結会計年度末における総設備容量72,150kW）で、売上高1,012百万円（前年同期比133.4%の増加）を計上いたしました。

又、風力発電機の販売については、1,500kWタイプ31基およびタワー20セット販売し、売上高4,814百万円（前年同期比8.7%の増加）となりました。

以上の結果、当連結会計年度の業績は、売上高5,827百万円（前年同期比19.6%増加）、営業利益730百万円（前年同期比81.3%増加）、経常利益504百万円（前年同期比20.1%減少）、当期純利益273百万円（前年同期比23.9%減少）となりました。（なお、経常利益ならびに当期純利益が前年を下回ったのは、前連結会計年度において、販売報奨金という一過性の収益282百万円が営業外収益に計上されていたためであります）

又、平成16年9月15日開催の取締役会決議に基づく普通株式14,000株の公募増資および普通株式2,000株のオーバーアロットメントによる売り出しに伴う941株の第三者割当増資を行い、それぞれ平成16年10月6日付、平成16年11月4日付で払込が完了し、総額2,758百万円の資金調達を行いました。なお、調達いたしました資金につきましては、現状および今後、当社が開発を行っていく風力発電事業会社への投融資に充当（最終的には風力発電事業会社の設備資金に充当）する予定であります。

なお、当期につきましては、平成17年3月31日現在の株主の皆様に対して、平成17年6月27日開催予定の第6回定時株主総会において、1株当たり1,200円の普通配当の実施を付議させて頂く予定であります（その場合の配当性向は29%です）。

これは当社連結、単体とも3期連続して収支が黒字計上となり一定の利益が積みあがったこと、ならびに当社連結子会社の風力発電所の設備容量も当期末において72,150kWとなり、概ね順調に稼働し収益も積みあがりつつあることから、取締役会において上記事項が決議となりました。

なお、今後については、従来以上に積極的に風力発電所建設を行う計画であることから、風力発電所建設に必要な設備資金と風力発電事業における収支のバランスを勘案し、内部留保ならびに利益配当を決定していく方針であります。

当社グループの所在地別セグメント業績は次のとおりであります。なお、当社グループの事業は風力発電事業という単一セグメントを構成していると認識しており、事業のセグメント情報は作成しておりません。

①日本

(1) 風力発電機（1,500kWタイプ）31基及びタワー20セットの売上計上。

(2) 過年度より稼働済みの銚子屏風ヶ浦風力開発(株)、銚子小浜風力開発(株)、六ヶ所村風力開発(株)、(株)MJウィンドパワー市原、ならびに当期より運転開始した館山風力開発(株)、銚子風力開発(株)、三浦ウィンドパーク(株)、肥前風力発電(株)の売電収入を計上。

以上より、売上高5,726百万円（前期比19.1%増加）、営業利益754百万円（前期比89.9%増加）となりました。

②欧州

JWD Till-moyland Windpark GmbH、JWD Rees Windpark GmbHならびにMITOS Windpark GmbHの3社による売電収入により、売上高101百万円（前期比62.2%の増加）、営業損失24百万円（前期は5百万円の営業利益）となりました。

次期の見通し

当社グループは次期においても、大型風力発電所の開発に経営資源の投入を行います。その中で、鳥取県大山町における風力発電所（9,000kW）の年度内の運転開始、銚子風力開発(株)の拡張（拡張後22,500kW）ならびに館山風力開発(株)の拡張（拡張後6,000kW）が建設となる予定であります。

又、当期において完成した風力発電所も通期に渡り収益に寄与すること、ならびに全国各地において好立地探索を行うことで、風力発電機の販売も当期以上を見込んでおります。

以上の結果、次期の業績につきましては、連結業績は売上高7,300百万円、経常利益660百万円、当期純利益380百万円、単体業績は、売上高6,200百万円、経常利益800百万円、当期純利益480百万円を見込んでおります。

※業績予想につきましては、発表日現在において入手可能な情報に基づいて作成したものであり、実際の業績は今後様々な要因によって予想数値と異なる場合があります。

(2) 財政状態

① 資産・負債・資本の状況

当期においては、館山風力開発㈱、銚子風力開発㈱、六ヶ所村風力開発㈱（拡張）、MITOS Windpark GmbH、肥前風力発電㈱の5つの発電所の完成ならびに三浦ウィンドパーク㈱による風力発電所の資産買収による固定資産の増加および平成16年10月に行った一般公募増資により、当期末の総資産は、19,663百万円（前期比6,201百万円の増加）、負債は12,453百万円（前期比3,009百万円の増加）、資本は7,037百万円（前期比3,116百万円の増加）となりました。

なお、当社グループにおける各指標の推移は下記の通りであります。

	第2期 平成13年	第3期 平成14年	第4期 平成15年	第5期 平成16年	第6期 平成17年
自己資本比率	40.9%	40.9%	25.3%	29.1%	35.8%
時価ベースの自己資本比率	—	—	191.9%	169.4%	116.7%
債務償還比率	—	—	7.8年	19.6年	—
インタレスト・カバレッジ・レシオ	—	—	14.7	6.2	—

(注) 1. 各項目の算出根拠は下記の通りであります。

$$(1) \text{自己資本比率} = \frac{\text{自己資本}}{\text{総資産}} \times 100$$

$$(2) \text{時価ベースでの自己資本比率} = \frac{\text{株式時価総額}}{\text{総資産}} \times 100$$

$$(3) \text{債務償還年数} = \frac{\text{有利子負債}}{\text{営業キャッシュフロー}} \times 100$$

$$(4) \text{インタレスト・カバレッジ・レシオ} = \frac{\text{営業キャッシュフロー}}{\text{支払利息}} \times 100$$

2. いずれも連結ベースでの財務数値により計算しております。
3. 営業キャッシュフローは、連結キャッシュフロー計算書の営業活動によるキャッシュフロー（営業キャッシュフローの小計額+利息及び配当金の受取額-利息の支払額-法人税等の支払額）を使用しております。
4. 支払利息は、連結キャッシュフロー計算書の利息の支払額を使用しております。
5. 有利子負債は、連結貸借対照表に計上されている負債のうち利子を支払っている全ての負債を対象としております。
6. 株式時価総額は、期末株価終値×期末発行済株式数により算出しております。
7. 当社は第2期より連結財務諸表を作成しております。
8. 第2期、第3期における時価ベースでの自己資本比率は、当社株式は非上場であり、かつ店頭登録もしていませんでしたので記載しておりません。
9. 第2期、第3期および第6期（当期）における債務償還年数、およびインタレスト・カバレッジ・レシオについては、営業キャッシュフローがいずれもマイナスであったため、記載しておりません。

## ② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における連結ベースの現金及び現金同等物（以下「資金」という）は、風力発電所建設に伴う固定資産が増加となったものの、一般公募増資の実施および金融機関からの調達を行った結果、前連結会計年度末に比べ847百万円増加し、3,469百万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次の通りであります。

### （営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果使用した資金は、1,258百万円（前期は435百万円の獲得）となりました。主な要因は、税引前当期利益の計上ならびに風力発電所運転開始に伴い減価償却が増加となりましたが、それを上回る売掛金の増加があったためであります。

### （投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果使用した資金は、4,103百万円（前期比17.7%の使用の増加）となりました。これは主に、銚子風力開発㈱をはじめとする5箇所の風力発電所の建設完了ならびに三浦ウィンドパーク㈱による風力発電所の資産買収に伴う固定資産の取得支出の増加によるものであります。

### （財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果獲得した資金は、6,183百万円（前期比1.9%の増加）となりました。これは一般公募増資の実施、および金融機関からの長期借入による資金調達が増加したことによるものであります。

## 事業等のリスク

以下において、当社の事業展開その他に関するリスク要因となる可能性があると考えられる主な事項を記載しております。また、必ずしもそのようなリスク要因に該当しない事項についても、投資者の投資判断上、重要であると考えられる事項については、投資者に対する積極的な情報開示の観点から以下に開示しております。なお、当社はこれらのリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避及び発生した場合の対応に努める方針であります。本株式に関する投資判断は、本項及び本書中の本項目以外の記載内容も併せて、慎重に検討した上で行われる必要があると考えております。また、以下の記載は本株式への投資に関連するリスク全てを網羅するものではありませんので、この点にご留意ください。

### 1. 当社グループの事業内容について

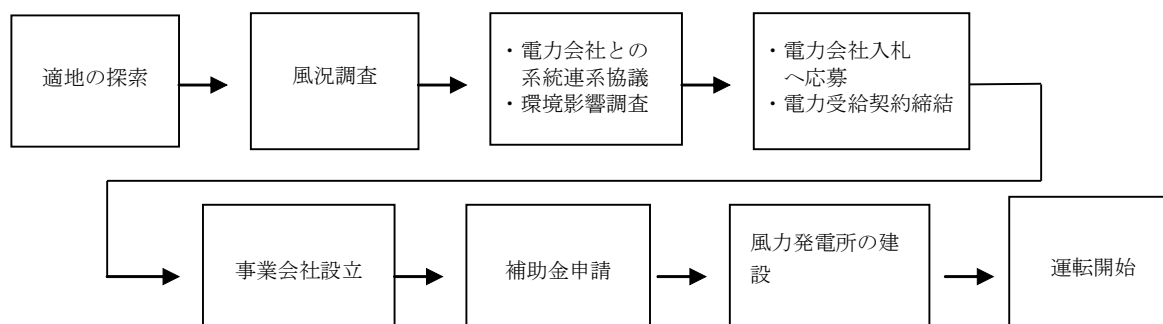
#### (1) 風力発電事業について

風力発電事業は、風力という再生可能な自然エネルギーを商業的に電力に変換する事業であります。化石エネルギー資源を燃料とする発電と異なり二酸化炭素を発生させることがないため、地球規模での環境問題が深刻化し、地球温暖化防止のための二酸化炭素の排出削減が世界的な関心事となりつつある中で、大きな注目を浴びている発電方法であります。風力発電先進国である欧米諸国では、既に商業的な事業としての地位を確立しております。

又、気象変動枠組条約第三回締約国会議において採択された「京都議定書」が平成17年2月に発効となっており、自然エネルギーを利用した風力発電の導入が従来以上に促進され、わが国においても、近年、急速に普及しつつあります。

#### ① 風力発電所開発の流れ

風力発電所開発業務の全体の流れを図示すると、下記のようになります。



#### i 適地の探索

風力発電所の開発に当たっては、最適な立地の確保が最も重要であります。風況の良い場所を確保することが事業の成否の鍵を握ります。これは風況により発電される電力量、つまり、事業の採算性が大きく左右されるためであります。ただし、実際の立地条件としては風況の良さに加え、電力会社の送電線への接続（系統連系）が容易（接続点までの送電設備の建設及び接続するために発生する設備工事費用は基本的に風力発電事業者の負担）であること、風力発電機の搬入が可能であること、更に建設工事が容易であることなどが求められます。

## ii 風況調査から事業会社設立まで

風力発電所の開発に当たっては、まず上記の条件に適合する立地を探し、土地所有者の同意を得た上で、風況の調査を一定期間実施します。風況の確認後に、電波障害、騒音、景観への影響等の一連の環境影響調査を行い、地元関係者のコンセンサスを得ます。この段階で、風力発電事業の年間発電電力量と建設費の概算が固まりますので、採算性がほぼ確定します。その後、電力会社と電力受給仮契約を締結します（本契約は実際に売電を開始する直前に締結します）。

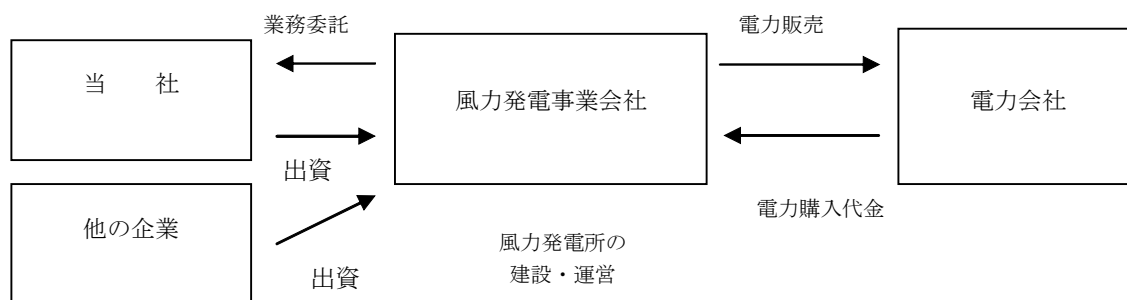
当社は、受給仮契約を締結した後に、風力発電所を建設・運営する事業会社を、原則、当社単独で設立し、事業の実施のために、他の企業等からの出資を受け入れることが有利であると判断される場合には、風力発電所の運転を開始するまでに、事業会社に他の企業等からの出資を受け入れることもあります。但し、風力発電所開発の過程において、電力受給仮契約締結以前に事業会社を設立した方が有利と判断した場合には、電力受給仮契約前に事業会社を設立する場合があります。

当社が、原則、風力発電所ごとに事業会社を設立する理由は、風力発電事業は枯渇することのないローカルなエネルギー資源を利用する事業であるため、地域社会に根ざした事業として、地域社会と共存共栄の関係を築くことが重要であるからです。また、風力発電所ごとに事業会社を設立することによって、事業会社ごとに他の企業等からの出資を受け入れることが可能になるとともに、個別の風力発電所の収益性を主な担保としたファイナンス手法による長期の資金調達が可能になるメリットがあります。

当社は事業会社を設立した後に、電力会社の承諾を得て、電力受給仮契約における当社の地位を事業会社へ譲渡します。

当社が主導的に推進していく事業では、事業会社設立後に、事業会社と業務委託契約を取り交わして、事業会社に代わって風力発電所の建設・管理に必要な業務を行います。

風力発電事業会社と、当社、他の出資者、電力会社の関係は下記のようになります。



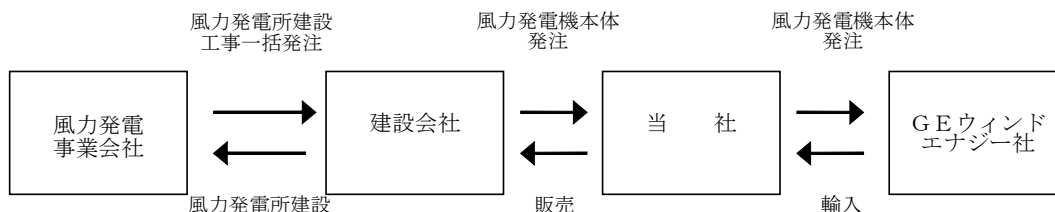
## iii 補助金申請

風力発電所の建設費に対しては国の補助金の制度（新エネルギー事業者支援対策事業）を利用できます。当社に限らず、風力発電事業者は補助金を前提に事業の採算性を判断しております。通常、国庫補助金の募集は年1回、毎年4月に実施されます。仮に、補助金の申請が採択されなかった場合には、事業の採算性を再検討（具体的には、出資金と外部からの借入れを増額）することになります。その結果、補助金がなくても一定の採算が確保できる場合には事業化を進めます。一方、補助金がなくては、採算が確保できないと判断した場合には、次年度に、再度、補助金を申請することになります。つまり、当該事業の実現を延期することになります。

なお、当社の連結子会社である六ヶ所村風力開発㈱、銚子小浜風力開発㈱、銚子風力開発㈱、肥前風力発電㈱、館山風力開発㈱ならびに大山ウィンドファーム㈱には補助金が交付されております。

iv 風力発電機納入（機器に関連する業務の流れ）

当社が開発に關与する風力発電所では、原則としてドイツのGE ウィンドエナジー社製の風力発電機を使用しております。事業会社が風力発電所の建設工事を建設会社へ発注してから、当社がGE ウィンドエナジー社へ風力発電機本体を発注するまでの流れは下記のようになります。



風力発電所の事業化が決定（補助金を利用する場合には、補助金の交付が決定した後）すると、事業会社は、風力発電所全体の建設費、納期及び性能等の保証に関する責任主体を建設会社に限定するため、建設会社（通常、入札によって決定します）と総合元請契約を締結し、建設会社へ風力発電所の建設工事を一括発注します。

事業会社と建設会社が締結する総合元請契約には、風力発電機本体の搬入、据付、試運転及び運転開始後の技術サポートが含まれております。通常は、建設会社がこれらの業務を行います。建設会社に風力発電所の建設経験がない場合等は、風力発電機本体と据付工事をエンジニアリング会社へ外注することもあります。

事業会社から発注を受けた建設会社は風力発電機本体を当社へ発注します。当社が開発に關与する風力発電所に使用する風力発電機本体をGE ウィンドエナジー社から仕入れるためには、風力発電所建設地の地質データ、建設許認可、電力会社の系統連系に関する技術資料、風況データ、風力発電機のレイアウト等の多くの技術資料をGE ウィンドエナジー社から要求されますが、これらのデータを提示できるのは風力発電所の開発行為を行っている当社のみであること、また、日本においてGE ウィンドエナジー社製風力発電機固有の技術情報と知識を持ったテクニカルスタッフを擁しているのは、現状、当社のみであることから、当社はGE ウィンドエナジー社製風力発電機の独占的地位を持った販売代理店ではありませんが、実態として、日本における唯一の輸入販売窓口となっております。

当社が風力発電所の開発を行うにあたって、事業会社へ風力発電機本体を直接販売するのではなく、建設会社へ販売しているのは、以下の理由からであります。

- a. 当社が事業会社へ風力発電機本体を直接販売した場合は、風力発電機本体は事業会社から建設会社への支給される機材となり、風力発電機本体の納期と性能は当社が保証し、それ以外の設備の納期と性能は建設会社が保証することになります。このように風力発電機本体とそれ以外の設備の納期及び性能保証の義務負担者が異なると、風力発電所の納期または性能に問題が発生した場合、責任の所在が不明確であるため、当社または事業会社に不測の損失が発生する懸念があります。このような事態を回避し、風力発電所の納期と性能に関する保証責任の所在を明確にするため、当社は風力発電機本体を建設会社へ販売し、当該建設会社と総合元請契約を締結しております。
- b. 当社が事業会社へ風力発電機本体を直接販売した場合には、当社がそれ以外の業務、つまり、風力発電機本体のGE ウィンドエナジー社から日本までの海上輸送、建設予定地への搬入、試運転及び検収に加えて、発電が開始された後のアフターサービスといった技術面のサポートも実施しなければなりません。これらの業務には経験、エンジニア及びサービス拠点が必要であり、当社がこれらの業務を行うには新たな経営資源の投入が必要となるため、当社は風力発電機本体を建設会社に販売し、これらの業務を含めた一連の業務を自らの責任で実施することとしております。

なお、当社は風力発電機本体をドイツの港渡しで建設会社へ引渡しておりますが、風力発電機本体が建設会社へ引渡されてから、日本までの海上輸送、建設サイトへの搬入、据付、風力発電所内の送電設備の建設等一連の工事、試運転、検収が終了し、建設会社が事業者へ風力発電所を引き渡すまでには、最短でも、6ヶ月から1年程度かかります。

#### v 建設

当社は風力発電所の開発を業務としておりますので、建設工事全体の予算管理や期日管理（所謂、プロジェクトマネジメント）を行い、実際の建設工事そのものは行いません。総合元請契約を締結した建設会社が建設工事を一括して請負い、完成までの責任を負います。

風力発電事業の事業化決定から、風力発電開始までに要する期間は、通常のケースで概ね2年から3年程度であります。

### ② 風力発電所の経営面の特徴

#### i 資金調達の方法

大型の風力発電所の建設には多額の資金が必要となります。資金調達は事業会社の株主からの出資金と金融機関からの長期融資により行います。

電力会社との電力受給契約における売電単価は契約期間（15－17年）固定価格であるため、事業として安定した売電収入が長期的に見込めます。よって、長期的な収益を返済の源資とし、原則、事業会社が資金調達を行います。

#### ii 主な事業コスト

風力発電所の採算性に影響を及ぼす主なコストは、風力発電機を含めた風力発電所全体設備の総建設費用、維持管理費用、金融機関への支払金利であります。維持管理費用は、運転期間中継続的に発生しますが、総建設費用は建設段階で確定し、減価償却により運転期間中費用化していきます。金利は、借入形態・借入条件により変動します。

### (2) 当社グループのビジネスモデルについて

当社のビジネスモデルに於ける当社単体の収益構造は以下のとおりです。

- ① 風力発電機の輸入販売
- ② 風力発電所の開発に係る受託収入
- ③ 風力発電所の運営・管理に係る受託収入
- ④ 風力発電所への出資による配当収入

当社グループのビジネスモデルでは、風力発電所毎に独立した風力発電事業会社を設立しますので、当社グループとしての収益には、上記に加えて、電力会社への売電収入があります。したがって、風力発電事業会社が当社の連結子会社である場合には、上記④は売電収入になります。

## 2. 風力発電事業を取り巻く状況について

風力発電は、1990年代以降、欧米を中心に急速に普及してきております。特に1990年代後半以降は、風力発電機の技術革新により発電性能とコストパフォーマンスが飛躍的に向上したことが普及を加速しております。

わが国においても、1995年の電気事業法改正により電力分野における規制緩和が実施されたことを契機に風力発電の普及が加速されました。1999年10月、北海道苫前町に発電容量2万kWの大規模風力発電所が運転を開始し、以後続々と大規模風力発電所の建設が進められております。その結果、1997年度に約2万kWであった、わが国の風力発電の発電容量が、2004年度末には約93万kWに達しました。

### (1) 政府による風力発電導入目標について

わが国における風力発電の今後の動向を見る上では、その普及において、国の政策が重要な決定要素と言えます。1997年の地球温暖化防止京都会議において、二酸化炭素などの温室効果ガス排出量を削減する国際的な合意が成立して以来、政府は温室効果ガスの約9割を占めるエネルギー起源からの二酸化炭素の排出について、「2010年度に1990年度と同水準に抑制する」という具体的な目標を掲げ、その実現に向けて動いております。非化石エネルギーの開発・導入の一層の促進が一つの柱とされ、2001年6月の総合資源エネルギー調査会新エネルギー部会報告「今後の新エネルギー対策のあり方」において、2010年度における風力発電の導入目標（発電容量）が従来の目標の10倍である300万kWに引き上げられました。

上記報告書では、2010年度に向けたわが国における新エネルギー対策のあり方について以下のようにとりまとめられております。

- ① エネルギー安定供給の確保、地球温暖化対策などの環境問題への対応などを考慮すれば、今後、新エネルギーの導入を拡大することが期待されている。また、新エネルギーの潜在性、今後の技術進歩の可能性、経済性向上の期待等を踏まえれば、長期的な将来において新エネルギーがわが国のエネルギー源の一翼を担うことを目指して意欲的に取り組むことが重要である。
- ② 新エネルギーは、環境負荷が小さく、また、資源制約が少ない国産エネルギー、または石油依存度低下に資する石油代替エネルギーとして、地球環境問題などへの対応やエネルギー安定供給の確保に貢献することに加えて、新規産業や雇用の創出に資するなどの様々な意義を有している。このような新エネルギー導入の意義を考慮すると、今後、わが国においては、新エネルギーが抱える各種課題を解決しながら、着実に新エネルギーの導入拡大を進めていくべきである。

### (2) 「電気事業者による新エネルギー等の利用に関する特別措置法」について

発電分野における新エネルギー導入促進のための方策の検討が進められ、2001年12月の新市場拡大措置検討小委員会報告書を受けて、2002年6月には「電気事業者による新エネルギー等の利用に関する特別措置法」（通称「RPS（注）法」）が公布され、2003年4月に施行されました。

（注）RPSとはRenewables Portfolio Standardの略語で、証書を用いた再生可能エネルギーの導入基準制度と説明されています。

RPS法によれば、経済産業大臣は、新エネルギー等電気の利用目標を定め、電気事業者（電力会社）に対して毎年度その販売電力量に応じ一定割合以上の新エネルギー等電気の利用を義務付けます。電気事業者は、義務を履行するに際して、①自ら新エネルギー等電気を発電する、②他から新エネルギー等電気を購入する、③他の電気事業者に義務を肩代わりさせる、のいずれかを選択することが認められます。電気事業者が正当な理由なく義務を履行しない場合には、経済産業大臣は期限を定めて義務を履行する旨の勧告または命令を行うことができます。

対象となる新エネルギー等電気は、風力、太陽光、廃棄物、バイオマス、中小水力等の新エネルギーを変換して得られる電気です。

### (3) 国による補助金制度について

政府は新エネルギー導入促進のため、「新エネルギー事業者支援対策事業」として補助金制度を整備しております。経済産業大臣認定を受けた利用計画に従って、風力、太陽光などの新エネルギーを利用する発電事業を対象として、事業費の補助金に加えて事業資金の借入に対する債務保証の制度があります。

補助金の補助率は風力発電所の建設費用の1/3以内ですが、過去2年間の補助率は当該費用の1/3の80%となっております。また、債務保証対象比率は対象債務の90%となっております。

### 3. 当社が開発する風力発電所と販売する風力発電機について

#### (1) 当社が開発する風力発電所について

当社が出資している営業運転中の風力発電所は、下記のとおりであります。

事業会社名	所在地	設備	発電容量	運転開始時期
JWD Rees Windpark GmbH	ドイツ ザルツベルゲン市	1,500 kW機1基	1,500 kW	平成13年2月
JWD Till-Moyland Windpark GmbH	ドイツ ザルツベルゲン市	2,500 kW機1基	2,500 kW	平成13年6月
銚子屏風ヶ浦風力開発(株)	千葉県銚子市	1,500 kW機1基	1,500 kW	平成13年9月
(株) エヌエスウインドパワーひびき	福岡県北九州市若松区	1,500 kW機10基	15,000 kW	平成15年3月
銚子小浜風力開発(株)	千葉県銚子市	1,500 kW機1基	1,500 kW	平成15年9月
六ヶ所村風力開発(株)	青森県上北郡六ヶ所村	1,500 kW機20基	30,000 kW	平成15年12月
(株)MJ ウィンドパワー市原	千葉県市原市	1,500 kW機1基	1,500 kW	平成16年3月
三浦ウィンドパーク(株)	神奈川県三浦市	400 kW機2基	800 kW	平成16年6月
館山風力開発(株)	千葉県館山市	1,500 kW機1基	1,500 kW	平成16年10月
六ヶ所村風力開発(株) (拡張)	青森県上北郡六ヶ所村	1,500 kW機2基	2,850 kW	平成16年11月
銚子風力開発(株)	千葉県銚子市	1,500 kW機9基	13,500 kW	平成16年11月
MITOS Windpark GmbH	ドイツ ザルツベルゲン市	1,500 kW機2基	3,000 kW	平成16年12月
肥前風力発電(株)	佐賀県唐津市	1,500 kW機8基	12,000 kW	平成17年3月

また、電力会社と電力受給仮契約を締結し、開発を進めている風力発電所は、下記のとおりであります。

事業会社名	所在地	設備	発電容量	運転開始時期
大山ウィンドファーム(株)	鳥取県西伯郡大山町	1,500 kW機6基	9,000 kW	平成17年11月

(運転開始時期は予定です。)

風力発電所建設に当たり、実際の建設工事は建設会社またはエンジニアリング会社が一括して請負い、完成までの責任を負うこととなります。当社は事業会社からプロジェクトマネージメントを業務受託して、工期の管理を徹底しますが、不測の事態の発生により、完成時期及び運転開始時期が遅延する可能性があります。

また、これら大規模風力発電所への出資に際しては、他の企業等からの出資受け入れが必要となることもあります。これら出資パートナーから当初の予定どおりの出資が受けられなかった場合、出資比率の見直し、新たな出資パートナーの選定等により風力発電所の完成時期及び運転開始時期が遅延する可能性があります。

## (2) 風力発電所の開発可能性について

風力発電所開発の立地条件は、風況が良好なことに加え、系統連系が可能であること、風力発電機の搬入が可能であること、建設工事が可能であること、環境に影響がないこと、地元関係者の賛同と協力を得ることができることという要件を満たす必要があります。当社では、潜在的に開発可能な地域は国内に多数あると判断しておりますが、風況のみが良好でも、前述のその他の総ての要素を満たさない地域では風力発電所を開発できません。このため、前述の要件を満たす立地が計画どおりに開発できない場合には、当社業績に影響を与える可能性があります。

## (3) 風力発電所の開発阻害要因について

当社は風力発電所開発にあたり、徹底した事前調査により、法的制約がある場合には、それをクリアすることは勿論のこと、建設地の地元関係者にも十分に説明し協力が得られる体制を整えるなど、実行可能性を十分に精査した上で開発に取り組んでおりますが、関係者が多く、また開発期間が長期に及ぶことから、建設工事に着工した段階で障害となる事項が発生あるいは発見される可能性があります。例えば、突発的に地元関係者からの建設反対運動が発生したり、事前に十分な調査をしたにも拘わらず、対象エリアの中に猛禽類や希少生物の営巣地・生息地が存在することが明らかになった場合、開発を中止することを余儀なくされます。

当社が開発する風力発電所において、開発阻害要因が発生あるいは発見されたことによって、開発を中止しなければならない場合には、当社にとって、その時までには先行投資した費用が回収不能となり、さらに事業からの期待利益の逸失等の影響が発生します。

## (4) 風力発電所運転開始後の風況変動について

風力エネルギーを利用していますので、風力発電の最大の弱みは、発電量のコントロールができないことです。当社が使用しているGEウィンドエナジー社製風力発電機は、風速3メートル/秒で発電を開始し、12メートル/秒で定格出力に達し、25メートル/秒で安全のために発電を停止します。この範囲で、安定した風が吹けば、安定した発電電力を得ることができます。

風況については、開発段階で長期間の風況データに基づいて開発の可否を決定しておりますが、風は不安定要素を含んだ気象現象ですので、予想どおりに風が吹かないこともあり得ます。予想どおりに風が吹かない場合には、売電収入が低下するために、当社業績に影響が発生します。

なお、運転開始後の風況変動による売電収入の低下に備えて、損害保険会社等から風況デリバティブや風況保険を購入することも考えられますが、現時点では、これらは一般的な商品ではないので費用が高いために、当社は利用しておりません。

## (5) 風力発電機の故障等について

当社が使用しているGEウィンドエナジー社製風力発電機は、数多くの納入実績を誇り、長期間の安定的使用に耐える風力発電機であると判断しておりますが、機械的故障が発生して、一定期間発電ができなくなる事態は発生し得ます。落雷・地震などの被害についてもメーカー側で対策は講じておりますが、予想の範囲を超えた場合、風力発電機及び発電所周辺地域に被害が生じる可能性があります。

当社としては、損害保険（具体的には、機械・火災保険、第三者に対する賠償責任保険、事故による逸失利益に対する利益保険）により不測の事態への対応を講じておりますが、風力発電機が甚大な被害を受ける事態が生じた場合には、当社の業績に影響を与える可能性があります。

#### (6)入札制度について

平成17年3月末現在、風力発電所の電力等の販売について入札を実施している電力会社はありません。現在は、各電力会社と各事業案件毎に、随時電力受給の協議、契約を行うか、または抽選により決定しております。

随意契約の場合は、入札制度と違い、各電力会社が行っていた入札の時期を待たずに風力発電所の開発を行うことができるメリットがあります。但し、随意契約により電力の販売価格が著しく低下したり、電力の販売価格の交渉が難航した場合には、風力発電所の開発、建設が計画より遅延し、当社の業績に影響を与える可能性があります。

#### (7)新技術の出現について

国が政策として一層の「新エネルギー」の導入を促進している背景には、社会経済を支えるエネルギー源として化石燃料に大きく依存しているという認識があります。現在、化石燃料に代わる再生可能エネルギーとしては、風力のほか太陽光、地熱、バイオマスなどが挙げられます。また、エネルギー利用効率を上げることにより化石燃料の使用量を削減することも重要であり、コ・ジェネレーション（発電機からの排熱を熱エネルギーとして利用することによってエネルギー利用効率を向上させる熱電併給発電技術）や燃料電池はエネルギー利用効率を上げる技術の代表的なものであります。

当社としては、RPS制度の対象となる新エネルギー等電気の中で、風力発電は価格競争力があり、かつ大規模な開発可能性があるかと判断しております。ただし、今後、風力以外の新エネルギーの利用方法の革新的技術が現れたり、再生可能なあるいはエネルギー利用効率を著しく上昇させる新技術が現れ急速に普及した場合、当社の業績に影響を与える可能性があります。

#### (8)風力発電機を特定の仕入先に依存していることについて

当社は、創業来GEウィンドエナジー社製風力発電機のみを取り扱ってきておりますが、日本における輸入販売総代理権といった独占的な契約を結んでいるわけではありません。しかし、風力発電機を輸入、販売するためには、当該風力発電機に関する技術情報を開示して、国内諸規制へ対応する必要があり、メーカーが販売先を多様化することは、企業秘密に属する技術情報が広く流出することを意味し、メーカーの競争力喪失の原因になりかねないことから、海外の有力風力発電機メーカーは日本国内の販売窓口を絞り込み、販売しております。当社とGEウィンドエナジー社との関係は上記のようなものであり、独占的な契約関係には無いものの、安定的かつ友好的な関係を維持しております。逆に、当社はGEウィンドエナジー社製風力発電機を取扱う、あるいは使用する義務を負っているわけではありません。

GEウィンドエナジー社は、平成14年5月まではエンロンウインド社という社名で、平成13年12月に米国連邦破産法11条を申請し破綻したエンロングループの傘下になりました。平成14年5月に買収によりGE（GENERAL ELECTRIC）グループの傘下に入りました。

GEウィンドエナジー社と当社の関係及び同社の経営状態について、当社は不安を抱いておらず、今後も安定的に推移するものと判断しておりますが、GEウィンドエナジー社と当社との関係が悪化したり、GEウィンドエナジー社の経営状態が悪化し、同社の信用力が低下した場合、当社の業績に影響を与える可能性があります。

また当社は、GEウィンドエナジー社が風力発電機メーカーとして世界のトップクラスにあると判断しておりますが、将来、同社の技術開発が遅れ、同社製風力発電機が競争力を失った場合、当社の業績に影響を与える可能性があります。

#### (9)為替の変動について

GEウィンドエナジー社からの風力発電機の仕入価格はユーロ建てとなっております。そのため、対円のユーロの為替変動によって、円貨での当社の仕入価格は変動します。当社は輸入した風力発電機を国内の建設会社へ販売しております。ユーロ建ての仕入価格を為替の先物レートにて円貨に換算し、これに一定の利益を上乗せした価格で国内の建設会社へ販売価格を決定しております。建設会社から当社の支払と、当社からGEウィンドエナジー社への支払のタイミングは原則一致しております。ただし、売買契約を締結してから納品までには数ヶ月かかりますので、適切なタイミングでの為替予約等のリスクヘッジにより、為替変動の影響を最小限にとどめる方針ですが、為替変動の幅が予想以上に大きくなり、あるいは為替予約のタイミングが不適切になることにより、為替の変動が当社の業績に影響を与える可能性があります。

また、当社はドイツ国内において3つの風力発電所を保有し、営業運転を行っております。現時点では具体的な計画はありませんが、今後も、海外における風力発電事業を検討していく考えであります。海外における風力発電事業が拡大した場合、為替の動向が当社の連結ベースの業績に影響を与える可能性があります。

(10) 事業会社への出資方針及び事業会社への出資比率の低下による配当収入の減少について

事業会社は、原則、当社単独で設立しますが、事業の実施のために他の企業等からの出資を受け入れることが有利であると判断される場合には、風力発電所の運転を開始するまでに、他の企業等からの出資を受け入れることもあります。したがって、現在当社単独出資の事業会社にも、今後、他の企業等からの出資を受け入れることがあります。

他の企業等から出資を受け入れる場合にも、当社は過半数あるいは経営の主導権を確保できる出資シェアを維持する方針であります。また、当社の資金余力の範囲内で出資シェアを最大化する方針であります。ただし、何らかの理由により、当社が主導権を確保できないとき、または主導権を維持しない事業では、当社の出資シェアを低下させることがあります。

当社単独出資の場合には、事業会社の利益から事業継続に必要な資金を留保した残りの余剰利益の全額を、当社が配当として受け取ることができますが、他の企業等から出資を受け入れた場合には、当社の受取配当額は減少します。

(11) 風力発電機の販売が特定の販売先に集中していることについて

当社は、風力発電機を輸入し、国内で据付または建設業務を行うエンジニアリング会社または建設会社に対して販売しております。風力発電機は建設後長期間にわたり使用することが必要であるため、据付・建設工事は信頼できる会社に依頼する必要があります。

当社は、当社株主である㈱関電工、㈱西島製作所ならびに㈱日本製鋼所と友好的関係にあり、3社の協力のもとに風力発電所の開発を推進して参りました。その結果、3社に対する売上高の売上高全体に占める比率が高くなっております。当社グループの直前3連結会計年度における3社に対する売上高は以下のとおりであります。

連結売上高

会社名	第4期（平成15年3月期）		第5期（平成16年3月期）		第6期（平成17年3月期）	
	売上高 （千円）	構成比 （%）	売上高 （千円）	構成比 （%）	売上高 （千円）	構成比 （%）
風力発電機の販売						
㈱西島製作所	863,200	21.2	3,358,668	68.9	2,095,880	36.0
㈱関電工	—	—	494,671	10.1	1,115,500	19.1
㈱日本製鋼所	2,929,000	72.1	416,447	8.6	—	—
その他	134,537	3.3	158,691	3.3	1,603,350	27.5
風力発電による売電	96,179	2.4	433,817	8.9	1,012,691	17.4
業務受託等	41,839	1.0	9,829	0.2	162	0.0
合計	4,064,756	100.0	4,064,756	100.0	5,827,584	100.0

（注）売上高には消費税等は含まれておりません。

なお、㈱関電工、㈱西島製作所ならびに㈱日本製鋼所は当社の株主であります。当社は3社との間で業務提携契約等は締結しておりません。これまでの取引実績より判断して、3社との関係は今後も良好に維持していけるものと考えておりますが、3社との関係が悪化した場合、当社の業績に影響を与える可能性があります。

#### 4. 当社の業績推移等について

##### (1) 売上高の変動要因並びに季節性について

国の補助金制度を受けて、風力発電所開発に際しては通常補助金の申請を行います。補助金の交付が受けられなければ、原則として風力発電所の開発は延期されます。これまでは、補助金の募集は年1回4月に行われており、交付決定は8月から9月となっていました。補助金の交付決定前に工事に着工すると、当該工事費用は補助金の対象とならなくなるため、交付決定を待って風力発電機を発注し、工事に着工するという流れになっておりました。加えて、大規模風力発電所で使用する風力発電機は、まとまった基数を短期間に船積みし、わが国向けに搬送するため、風力発電機販売に係る当社の売上高は下半期、特に第4四半期に集中しております。最近2事業年度における当社単体の四半期別の売上高推移は下表のとおりであります。

##### 当社単体売上高

	第5期（平成16年3月期）				
	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	合計
売上高（千円）	416,965	481,077	578,078	3,307,550	4,783,672
構成比（％）	8.7	10.1	12.1	69.1	100.0

	第6期（平成17年3月期）				
	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	合計
売上高（千円）	314,448	656,524	304,420	3,876,123	5,151,516
構成比（％）	6.1	12.7	5.9	75.3	100.0

（注）上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

#### 5. 当社の事業体制について

##### (1) 小規模組織であること及び今後の組織拡大について

当社は平成17年3月31日現在、役員9名、従業員33名（当社グループでは48名）と比較的小規模な組織であります。

当期において、風力発電所の効率的な開発を行うためならびに稼動した風力発電所の保守管理業務を行うために、立地開発、用地部門ならびに業務部門の増強を行いました。今後も風力発電のマーケットは急速に拡大すると予想されております。このため、今後の更なる事業拡大と業務量の増加に備え、従業員の育成、人員の増強及び内部管理体制の一層の充実を図る方針であります。人材の確保及び内部管理体制の充実が思うように進められない場合、適切な組織的対応ができず、当社の業務効率や事業拡大に支障をきたす可能性があります。

## 6. 今後の事業展開について

### (1) 国による風力発電導入促進の支援措置について

風力発電業界の動向は、国の政策によりきわめて大きい影響を受けます。特に、2003年4月から施行されたRPS法が、当面の国の政策の方向性を示していると考えております。

今後、短期間で政策の方向性に大きな変化が生じることになった場合には、当社の業績に大きな影響を与える可能性があります。

### (2) 収益構造の特徴と資金確保について

当社グループとしては、風力発電所の開発、風力発電所への投資と運営に伴って得られる収益は長期的に着実に拡大していくものの、風力発電機輸入販売に伴う収益は比較的短期間に増加し、国内での新規風力発電所開発が一段落すると見込まれる頃（2010年前後）から安定的に推移すると予想しております（ただし、その頃には、過去に建設された他社小型風力発電機の更新需要も見込まれます）。その結果、今後数年間は、風力発電機輸入販売と風力発電所の開発による収益が当社グループの収益に大きい割合を占め、その後、風力発電所への投資と運営に伴う収益（運営に係る業務受託収入、配当収入、売電収入）が、もう一つの収益の柱になると予想しております。

風力発電所の開発、風力発電所への投資と運営に伴う収益を拡大するためには、その原資の調達が必要であります。外部からの資金調達と今後の内部留保によって、この資金を拠出する計画ですが、当社が必要な資金を確保できなかった場合には、これら期待収益の実現は困難となり、長期的に当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

### (3) 競合について

風力発電は、風の力によって風力発電機を回して電力を発生させるものであり、発生させる電力の質に違いが生じるものではありません。場所や使用する風力発電機に左右されることなく、発生した電力は同じように利用することができます。事業としての優劣を決定するのは、①立地場所の風況の良否、②使用する風力発電機の性能、③総建設費の高低、④電力販売単価の高低、⑤運営費の高低、⑥資金調達方法・コストの差異、といった経済的な要因であります。

当社は立地発掘のネットワークを拡充してきたことによって、各地の風況データ等に関するデータベースが既に構築されていること、風力発電所の建設管理や建設資金調達については、各分野での一流の経験者を採用していること、また、風力発電所の保守管理については、他社に先駆けて、保守管理を専業とするイオスサービス(株)を設立済みで、海外の風力発電所で保守管理業務を経験したスタッフも採用していることなどから、現時点で競合他社に対して優位性を有していると認識しておりますので、競合他社及び新規参入者とは差別化が図れると判断しております。

ただし、競争の激化により、当社が相対的な優位性を継続して維持できなくなる事態が発生することも考えられます。その様な事態に陥った場合には、当社の中長期的な業績の維持・拡大に影響を与える可能性があります。

## 7. 法的規制について

風力発電所の建設・運営に当たっては、電気事業法、建築基準法、航空法の規制を受けます。関連法規に基づき必要とされる主な許認可の取得または届出は主に以下のとおりであります。また、この他に、地方自治体によって制定された条例（騒音、景観等に関する規制）を遵守する必要があります。

### ①電気事業法

保安規程の届出（第42条）、電気主任技術者選任の届出（第43条）、工事計画書の届出（第48条）

### ②建築基準法

工作物確認の申請（第88条）

### ③航空法

航空障害灯設置の届出（第51条）

関連法規や地域の条例が改正された場合には、風力発電所の開発に影響が及び、当社の業績に影響を与える可能性があります。

## 8. 関連当事者との取引について

第5期連結会計年度（自平成15年4月1日 至平成16年3月31日）における関連当事者との取引に該当する事項はありません。

第6期連結会計年度（自平成16年4月1日 至平成17年3月31日）における関連当事者との取引に該当する事項はありません。

## 経営上の重要な契約等

### (1) 風力発電機の仕入

契約会社名	相手方の名称	国名	契約品目	契約内容	契約期間
日本風力開発㈱ (当社)	GE Wind Energy GmbH	独国	風力発電機	当社がGE Wind Energy GmbHから風力発電機を購入するに際しての取引基本契約	自 平成16年1月1日 至 平成19年3月31日

### (2) 電力の販売

契約会社名	相手方の名称	契約品目	契約内容	契約期間
銚子屏風ヶ浦風力開発㈱ (連結子会社)	東京電力㈱	風力発電による 売電	電力受給契約	自 平成13年9月1日 至 平成28年8月31日
銚子小浜風力開発㈱ (連結子会社)	東京電力㈱	風力発電による 売電	電力受給契約	自 平成15年9月18日 至 平成30年9月17日
六ヶ所村風力開発㈱ (連結子会社)	東北電力㈱	風力発電による 売電	電力受給契約	自 平成15年11月27日 至 平成32年11月26日
㈱MJウィンドパワー市原 (連結子会社)	東京電力㈱	風力発電による 売電	電力受給契約	自 平成16年3月9日 至 平成31年3月8日
三浦ウィンドパーク㈱ (連結子会社)	東京電力㈱	風力発電による 売電	電力受給契約	自 平成16年10月1日 至 平成17年9月30日 (注)
館山風力開発㈱ (連結子会社)	東京電力㈱	風力発電による 売電	電力受給契約	自 平成16年10月20日 至 平成31年10月19日
銚子風力開発㈱ (連結子会社)	東京電力㈱	風力発電による 売電	電力受給契約	自 平成16年11月22日 至 平成31年11月21日
肥前風力発電㈱ (連結子会社)	九州電力㈱	風力発電による 売電	電力受給契約	自 平成17年3月31日 至 平成32年3月30日

(注) 契約有効期間満了前に、契約当事者双方において異議がない場合は、さらに1ヵ年継続してその効力を延伸するものとし、以後この例による。

## 研究開発活動

該当事項はありません。

#### 4. 連結財務諸表等

##### (1) 連結貸借対照表

区分	注記 番号	前連結会計年度 (平成16年3月31日)		当連結会計年度 (平成17年3月31日)	
		金額 (千円)	構成比 (%)	金額 (千円)	構成比 (%)
(資産の部)					
I 流動資産					
1. 現金及び預金	※1		2,621,898		3,469,326
2. 受取手形及び売掛金			323,390		2,271,355
3. たな卸資産			120,789		131,109
4. 繰延税金資産			17,977		35,094
5. その他			435,856		254,083
流動資産合計			3,519,912	26.1	6,160,970
II 固定資産					
1. 有形固定資産	※1、3				
(1) 建物及び構築物		329,816		623,121	
減価償却累計額		2,309	327,507	12,446	610,674
(2) 機械装置及び運搬具		6,546,893		11,531,071	
減価償却累計額		182,734	6,364,159	541,453	10,989,618
(3) 工具、器具及び備品		42,092		50,005	
減価償却累計額		7,065	35,027	9,546	40,458
(4) 土地			7,820		20,795
(5) 建設仮勘定			2,697,691		1,055,804
有形固定資産合計			9,432,205	70.1	12,717,351
2. 無形固定資産			22,433	0.2	17,828
3. 投資その他の資産					
(1) 投資有価証券	※1、2		63,019		61,973
(2) 長期貸付金	※1		194,436		174,779
(3) 繰延税金資産			94,384		185,335
(4) その他			135,632		345,647
投資その他の資産合計			487,473	3.6	767,734
固定資産合計			9,942,111	73.9	13,502,915
資産合計			13,462,024	100.0	19,663,886

区分	注記 番号	前連結会計年度 (平成16年 3月31日)		当連結会計年度 (平成17年 3月31日)	
		金額 (千円)	構成比 (%)	金額 (千円)	構成比 (%)
(負債の部)					
I 流動負債					
1. 支払手形及び買掛金		186,073		214,905	
2. 短期借入金		3,405,548		3,493,792	
3. 1年以内返済予定長期借入金	※1	2,460,990		3,560,726	
4. 未払金		383,270		41,894	
5. 未払法人税等		287,393		289,435	
6. その他		30,593		40,249	
流動負債合計		6,753,869	50.2	7,641,003	38.8
II 固定負債					
1. 長期借入金	※1	2,690,004		4,812,466	
固定負債合計		2,690,004	20.0	4,812,466	24.5
負債合計		9,443,873	70.2	12,453,469	63.3
(少数株主持分)					
少数株主持分		96,282	0.7	172,449	0.9
(資本の部)					
I 資本金	※4	1,848,492	13.7	3,262,997	16.6
II 資本剰余金		1,724,364	12.8	3,138,868	16.0
III 利益剰余金		333,491	2.5	606,940	3.1
IV その他有価証券評価差額金		—	—	—	—
V 為替換算調整勘定		15,518	0.1	29,160	0.1
VI 自己株式		—	—	—	—
資本合計		3,921,867	29.1	7,037,967	35.8
負債、少数株主持分及び資本合計		13,462,024	100.0	19,663,886	100.0

## (2) 連結損益計算書

区分	注記 番号	前連結会計年度 (自 平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)			当連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)		
		金額 (千円)		百分比 (%)	金額 (千円)		百分比 (%)
I 売上高	※1		4,872,124	100.0		5,827,584	100.0
II 売上原価			3,766,916	77.3		3,942,222	67.7
売上総利益			1,105,208	22.7		1,885,362	32.3
III 販売費及び一般管理費			702,573	14.4		1,155,334	19.8
営業利益			402,634	8.3		730,027	12.5
IV 営業外収益							
1. 受取利息			9,916			11,780	
2. 販売報奨金			282,878			—	
3. 為替差益			—			95	
4. 雑収入			25,904	318,698	6.5	10,630	22,506
V 営業外費用							
1. 支払利息		54,727			199,747		
2. 新株発行費		12,818			34,627		
3. IR費用		15,939			12,503		
4. 持分法による投資損失		4,025			1,004		
5. 雑損失		2,003	89,515	1.8	50	247,932	4.2
経常利益			631,817	13.0		504,601	8.7
VI 特別利益	※2						
1. 持分変動損益			776			—	
2. 国庫補助金収入			—			2,929	
3. 関係会社株式売却益		—	776	0.0	182	3,112	0.0
VII 特別損失							
1. プロジェクト整理損失		28,315	28,315	0.6	10,089	10,089	0.2
税金等調整前当期純利益			604,278	12.4		497,624	8.5
法人税、住民税及び事業税		334,976			336,806		
法人税等調整額		△87,915	247,061	5.1	△108,067	228,739	3.9
少数株主損失			2,068	0.0		4,564	0.1
当期純利益			359,284	7.3		273,449	4.7

## (3) 連結剰余金計算書

		前連結会計年度 (自 平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)		当連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)	
区分	注記 番号	金額 (千円)		金額 (千円)	
(資本剰余金の部)					
I 資本剰余金期首残高			757,228		1,724,364
II 資本剰余金増加高					
1. 増資による新株発行		967,136	967,136	1,414,503	1,414,503
III 資本剰余金期末残高			1,724,364		3,138,868
(利益剰余金の部)					
I 利益剰余金期首残高			△28,355		333,491
II 利益剰余金増加高					
1. 当期純利益		359,284		273,449	
2. 持分法適用会社の減少に伴う剰余金増加高		2,561	361,846	—	273,449
III 利益剰余金減少高					
1. 配当金		—		—	
2. 役員賞与		—	—	—	—
IV 利益剰余金期末残高			333,491		606,940

## (4) 連結キャッシュ・フロー計算書

		前連結会計年度 (自 平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)
区分	注記 番号	金額 (千円)	金額 (千円)
I 営業活動によるキャッシュ・フロー			
税金等調整前当期純利益		604,278	497,624
減価償却費		91,842	376,989
受取利息及び受取配当金		△9,916	△11,780
支払利息		54,727	199,747
持分法による投資損益		4,025	1,004
持分変動損益		△776	—
関係会社株式売却益		—	△182
売上債権の増減額(△は増加)		△110,037	△1,947,352
たな卸資産の増減額(△は増加)		△62,476	△10,320
前渡金の増減額		1,196	168
その他流動資産の増加額(△は増加)		△53,790	171,488
仕入債務の増加額		67,234	28,806
為替差益		—	△7,337
未払金の増減額(△は減少)		102,337	△60,099
その他流動負債の増加額(△は減少)		△22,456	38,244
小計		666,189	△722,999
利息及び配当金の受取額		3,059	12,429
利息の支払額		△70,010	△186,351
法人税等の支払額		△163,376	△361,235
営業活動によるキャッシュ・フロー		435,862	△1,258,156
II 投資活動によるキャッシュ・フロー			
有形固定資産の取得による支出		△5,656,053	△5,190,799
無形固定資産の取得による支出		△23,243	—
固定資産の売却による収入		—	4,734
投資有価証券の取得による支出		△19,500	—
投資有価証券の売却による収入		16,000	—
関係会社株式の売却による収入		—	2,500
貸付けによる支出		△3,738	△229
貸付金の回収による収入		3,210	19,657
国庫補助金による収入		781,778	1,275,085
投資その他資産の増減額(△は増加)		△88,975	△214,592
投資活動によるキャッシュ・フロー		△4,990,523	△4,103,643

		前連結会計年度 (自 平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)
区分	注記 番号	金額 (千円)	金額 (千円)
III 財務活動によるキャッシュ・フロー			
短期借入金の純増加額		2,785,548	88,243
長期借入れによる収入		2,231,047	6,910,433
借入金の返済による支出		△897,232	△3,718,613
株式の発行による収入		1,938,757	2,829,007
少数株主からの払込による収入		9,200	74,780
少数株主への配当金支払額		—	△523
財務活動によるキャッシュ・フロー		6,067,321	6,183,328
IV 現金及び現金同等物に係る換算差額		△275	25,900
V 現金及び現金同等物の増減額		1,512,384	847,428
VI 現金及び現金同等物の期首残高		1,109,513	2,621,898
VII 新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額		—	—
VIII 現金及び現金同等物の期末残高		2,621,898	3,469,326

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項

<p>前連結会計年度 (自 平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)</p>	<p>当連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)</p>
<p><u>1. 連結の範囲に関する事項</u>                      連結子会社の数 13社                      連結子会社名                      銚子屏風ヶ浦風力開発(株)                      銚子小浜風力開発(株)                      銚子風力開発(株)                      六ヶ所村風力開発(株)                      イオスサービス(株)                      渥美風力開発(株)                      EOS Energy Limited.                      JWD Rees Windpark GmbH                      JWD Till-Moyland Windpark GmbH                      肥前風力発電(株)                      (株)M J ウィンドパワー市原                      二又風力開発(株)                      館山風力開発(株)</p> <p>上記のうち、肥前風力発電(株)、(株)M J ウィンドパワー市原、二又風力開発(株)及び館山風力開発(株)は、当連結会計年度において新たに設立したため、連結の範囲に含めております。</p>	<p><u>1. 連結の範囲に関する事項</u>                      連結子会社の数 17社                      連結子会社名                      銚子屏風ヶ浦風力開発(株)                      銚子小浜風力開発(株)                      銚子風力開発(株)                      六ヶ所村風力開発(株)                      イオスサービス(株)                      渥美風力開発(株)                      EOS Energy Limited.                      JWD Rees Windpark GmbH                      JWD Till-Moyland Windpark GmbH                      MITOS Windpark GmbH                      肥前風力発電(株)                      (株)M J ウィンドパワー市原                      二又風力開発(株)                      館山風力開発(株)                      三浦ウィンドパーク(株)                      大山ウィンドファーム(株)                      鴨川風力開発(株)</p> <p>上記のうち、三浦ウィンドファーム(株)、大山ウィンドパーク(株)、MITOS Windpark GmbH、及び鴨川風力開発(株)は、当連結会計年度において新たに設立したため、連結の範囲に含めております。</p>
<p><u>2. 持分法の適用に関する事項</u>                      (1) 持分法を適用した関連会社数 1社                      会社名                      西日本風力開発(株)                      西日本風力開発(株)は当連結会計年度において新たに設立されましたが、その重要性から持分法の適用範囲に含めております。                      なお、クリーンエネルギーファクトリー(株)については、当中間連結会計期間までは持分法を適用しておりましたが、当第3四半期において役員の兼任がなくなったことにより持分法の適用範囲から除外し、当第4四半期において、全ての株式の有償譲渡を行ったことより、関連会社から外れております。                      (尚、北海道クリーンエネルギーファクトリー(株)は、平成15年12月20日開催の臨時株主総会において社名をクリーンエネルギーファクトリー(株)に変更しております。)</p> <p>(2) 持分法を適用していない関連会社数 1社                      会社名                      (株)アイピーピー</p> <p>(持分法適用の範囲から除いた理由)                      (株)アイピーピーは、連結純損益及び利益剰余金に与える影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため、持分法の適用の範囲から除外しております。</p>	<p><u>2. 持分法の適用に関する事項</u>                      (1) 持分法を適用した関連会社数 1社                      会社名                      西日本風力開発(株)</p> <p>(2) 持分法を適用していない関連会社数 1社                      会社名                      (株)アイピーピー</p> <p>(持分法適用の範囲から除いた理由)                      同 左</p>



<p style="text-align: center;">前連結会計年度 (自 平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)</p>	<p style="text-align: center;">当連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)</p>
<p>(4) 重要なリース取引の処理方法 リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。</p> <p>(5) 重要なヘッジ会計の方法</p> <p>① ヘッジ会計の方法 繰延ヘッジ処理によっております。 為替変動リスクのヘッジについては振当処理を採用しております。</p> <p>② ヘッジ手段とヘッジ対象 ヘッジ手段・・・為替予約 ヘッジ対象・・・外貨建ての輸入予定取引</p> <p>③ ヘッジ方針 外貨建ての輸入予定取引の為替変動リスクをヘッジするために、為替予約を利用することとし、ヘッジ手段である為替予約は、ヘッジ対象である外貨建ての輸入予定取引の範囲内で行なうこととしております。</p> <p>④ ヘッジ有効性評価の方法 ヘッジ手段がヘッジ対象である予定取引の重要な条件とほぼ同一であり、ヘッジ開始時、及びその後も継続して相場変動を完全に相殺するものであると想定できるため、ヘッジの有効性の判定を省略しております。</p>	<p>(4) 重要なリース取引の処理方法 同左</p> <p>(5) 重要なヘッジ会計の方法</p> <p>① ヘッジ会計の方法 繰延ヘッジ処理によっております。 為替予約 為替変動リスクのヘッジについては振当処理を採用しております。 金利スワップ 金融商品に係る会計基準に定める特例処理によっております。</p> <p>② ヘッジ手段とヘッジ対象</p> <p>a. ヘッジ手段 為替予約 ヘッジ対象 外貨建ての輸入予定取引</p> <p>b. ヘッジ手段 金利スワップ ヘッジ対象 借入金</p> <p>③ ヘッジ方針 為替予約 外貨建ての輸入予定取引の為替変動リスクをヘッジするために、為替予約を利用することとし、ヘッジ手段である為替予約は、ヘッジ対象である外貨建ての輸入予定取引の範囲内で行なうこととしております。 金利スワップ 金利変動リスクをヘッジするために、金利スワップを利用することとし、ヘッジ手段である金利スワップは、ヘッジ対象である借入金の範囲内で行なうこととしております。</p> <p>④ ヘッジ有効性評価の方法 為替予約 ヘッジ手段がヘッジ対象である予定取引の重要な条件とほぼ同一であり、ヘッジ開始時、及びその後も継続して相場変動を完全に相殺するものであると想定できるため、ヘッジの有効性の判定を省略しております。 金利スワップ 特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価は省略しております。</p>

<p style="text-align: center;">前連結会計年度 (自 平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)</p>	<p style="text-align: center;">当連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)</p>
<p>(6) その他連結財務諸表作成のための重要な事項</p> <p>イ. 消費税等の会計処理 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。</p> <p>二. 支払利息の原価算入 風力発電事業固定資産の建設のために充当した資金のうち、その開発資金を借入金により調達している長期プロジェクトにおいては、開発の完了までの支払利息を取得原価に算入しております。 当連結会計年度において取得原価に算入した支払利息は、85,604千円であります(前連結会計年度における取得原価に算入した支払利息は10,373千円)。 尚、金額の重要性が増したために、当連結会計年度より記載しております。</p>	<p>(6) その他連結財務諸表作成のための重要な事項</p> <p>イ. 消費税等の会計処理 同左</p> <p>二. 支払利息の原価算入 風力発電事業固定資産の建設のために充当した資金のうち、その開発資金を借入金により調達している長期プロジェクトにおいては、開発の完了までの支払利息を取得原価に算入しております。 当連結会計年度において取得原価に算入した支払利息は、64,129千円であります。</p>
<p>5. 連結子会社の資産及び負債の評価に関する事項 連結子会社の資産及び負債の評価については、全面時価評価法を採用しております。</p>	<p>5. 連結子会社の資産及び負債の評価に関する事項 同左</p>
<p>6. 連結調整勘定の償却に関する事項</p>	<p>6. 連結調整勘定の償却に関する事項</p>
<p>7. 利益処分項目等の取り扱いに関する事項 連結剰余金計算書は、連結会社の利益処分について連結会計年度中に確定した利益処分に基づいて作成しております。</p>	<p>7. 利益処分項目等の取り扱いに関する事項 同左</p>
<p>8. 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲 手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。</p>	<p>8. 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲 同左</p>

注記事項

(連結貸借対照表関係)

前連結会計年度 (平成16年3月31日)	当連結会計年度 (平成17年3月31日)																				
<p>※1 担保に供している資産</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">現金及び預金</td> <td style="text-align: right;">50,913千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">建物及び構築物</td> <td style="text-align: right;">5,593千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">機械装置及び運搬具</td> <td style="text-align: right;">705,688千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">工具、器具及び備品</td> <td style="text-align: right;">391千円</td> </tr> </table> <p>上記物件は、1年以内返済予定長期借入金60,990千円、長期借入金665,956千円の担保に供しております。</p>	現金及び預金	50,913千円	建物及び構築物	5,593千円	機械装置及び運搬具	705,688千円	工具、器具及び備品	391千円	<p>※1 担保に供している資産</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">現金及び預金</td> <td style="text-align: right;">917,636千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">建物及び構築物</td> <td style="text-align: right;">5,177千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">機械装置及び運搬具</td> <td style="text-align: right;">1,164,128千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">工具、器具及び備品</td> <td style="text-align: right;">345千円</td> </tr> </table> <p>上記物件は、1年以内返済予定長期借入金374,864千円、長期借入金4,812,466千円の担保に供しております。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">投資有価証券</td> <td style="text-align: right;">19,900千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">長期貸付金</td> <td style="text-align: right;">132,250千円</td> </tr> </table>	現金及び預金	917,636千円	建物及び構築物	5,177千円	機械装置及び運搬具	1,164,128千円	工具、器具及び備品	345千円	投資有価証券	19,900千円	長期貸付金	132,250千円
現金及び預金	50,913千円																				
建物及び構築物	5,593千円																				
機械装置及び運搬具	705,688千円																				
工具、器具及び備品	391千円																				
現金及び預金	917,636千円																				
建物及び構築物	5,177千円																				
機械装置及び運搬具	1,164,128千円																				
工具、器具及び備品	345千円																				
投資有価証券	19,900千円																				
長期貸付金	132,250千円																				
<p>※2 非連結子会社及び関連会社に対するものは次の通りであります。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">投資有価証券(株式)</td> <td style="text-align: right;">18,619千円</td> </tr> </table>	投資有価証券(株式)	18,619千円	<p>※2 非連結子会社及び関連会社に対するものは次の通りであります。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">投資有価証券(株式)</td> <td style="text-align: right;">17,573千円</td> </tr> </table>	投資有価証券(株式)	17,573千円																
投資有価証券(株式)	18,619千円																				
投資有価証券(株式)	17,573千円																				
<p>※3 当期において、国庫補助金の受入により、建物について2,326千円、建物附属設備について1,028千円、構築物について38,124千円、機械装置について736,743千円、工具器具備品について3,288千円の圧縮記帳を行いました。</p>	<p>※3 当期において、国庫補助金の受入により、建物について2,267千円、建物附属設備について1,868千円、構築物について79,186千円、機械装置について1,188,822千円、工具器具備品について3,206千円の圧縮記帳を行いました。</p>																				
<p>※4 当社の発行済株式総数は、普通株式80,874株であります。</p>	<p>※4 当社の発行済株式総数は、普通株式96,874株であります。</p>																				

## (連結損益計算書関係)

前連結会計年度 (自 平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)																
<p>※1 販売費及び一般管理費のうち、主要な費目及び金額は次のとおりであります。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">役員報酬</td> <td style="text-align: right;">54,210千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">従業員給与</td> <td style="text-align: right;">137,302千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">業務委託費</td> <td style="text-align: right;">161,391千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">減価償却費</td> <td style="text-align: right;">91,842千円</td> </tr> </table> <p>※2 当連結会計年度において、持分法適用会社であった北海道クリーンエネルギーファクトリー(株)が、第三者割当増資の実施を行ったことにより、持分変動損益が776千円発生しております。 (尚、北海道クリーンエネルギーファクトリーは、平成15年12月20日開催の臨時株主総会において、クリーンエネルギーファクトリー(株)に社名を変更しております。)</p>	役員報酬	54,210千円	従業員給与	137,302千円	業務委託費	161,391千円	減価償却費	91,842千円	<p>※1 販売費及び一般管理費のうち、主要な費目及び金額は次のとおりであります。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">役員報酬</td> <td style="text-align: right;">84,819千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">従業員給与</td> <td style="text-align: right;">169,694千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">業務委託費</td> <td style="text-align: right;">147,701千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">減価償却費</td> <td style="text-align: right;">376,989千円</td> </tr> </table>	役員報酬	84,819千円	従業員給与	169,694千円	業務委託費	147,701千円	減価償却費	376,989千円
役員報酬	54,210千円																
従業員給与	137,302千円																
業務委託費	161,391千円																
減価償却費	91,842千円																
役員報酬	84,819千円																
従業員給与	169,694千円																
業務委託費	147,701千円																
減価償却費	376,989千円																

## (連結キャッシュ・フロー計算書関係)

前連結会計年度 (自 平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)								
<p>現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係</p> <p style="text-align: right;">(平成16年3月31日現在)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">現金及び預金勘定</td> <td style="text-align: right;">2,621,898千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">現金及び現金同等物</td> <td style="text-align: right;">2,621,898千円</td> </tr> </table>	現金及び預金勘定	2,621,898千円	現金及び現金同等物	2,621,898千円	<p>現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係</p> <p style="text-align: right;">(平成17年3月31日現在)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">現金及び預金勘定</td> <td style="text-align: right;">3,469,326千円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">現金及び現金同等物</td> <td style="text-align: right;">3,469,326千円</td> </tr> </table>	現金及び預金勘定	3,469,326千円	現金及び現金同等物	3,469,326千円
現金及び預金勘定	2,621,898千円								
現金及び現金同等物	2,621,898千円								
現金及び預金勘定	3,469,326千円								
現金及び現金同等物	3,469,326千円								

① リース取引

前連結会計年度 (自 平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)				当連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)			
リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引				リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引			
(1) リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び期末残高相当額				(1) リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び期末残高相当額			
	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	期末残高相当額		取得価額相当額	減価償却累計額相当額	期末残高相当額
	千円	千円	千円		千円	千円	千円
工具、器具及び備品	30,126	10,641	19,485	工具、器具及び備品	33,226	21,933	11,293
その他	1,007	615	391	その他	1,007	951	55
合計	31,134	11,257	19,877	合計	34,234	22,884	11,349
(2) 未経過リース料期末残高相当額				(2) 未経過リース料期末残高相当額			
	1年内		8,886千円		1年内		8,042千円
	1年超		14,860千円		1年超		9,862千円
	合計		23,747千円		合計		17,904千円
(3) 支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額				(3) 支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額			
	支払リース料		6,403千円		支払リース料		9,568千円
	減価償却費相当額		9,670千円		減価償却費相当額		11,627千円
	支払利息相当額		519千円		支払利息相当額		625千円
(4) 減価償却費相当額の算定方法				(4) 減価償却費相当額の算定方法			
リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。				リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。			
(5) 利息相当額の算定方法				(5) 利息相当額の算定方法			
リース料総額とリース物件の取得価額相当額との差額を利息相当額とし、各期への配分方法については、利息法によっております。				リース料総額とリース物件の取得価額相当額との差額を利息相当額とし、各期への配分方法については、利息法によっております。			

② 有価証券

前連結会計年度（平成16年3月31日現在）

1. 時価のない主な有価証券の内容

	連結貸借対照表計上額（千円）
その他有価証券	
非上場株式（店頭売買株式を除く）	44,400

当連結会計年度（平成17年3月31日現在）

1. 時価のない主な有価証券の内容

	連結貸借対照表計上額（千円）
その他有価証券	
非上場株式（店頭売買株式を除く）	44,400

③ デリバティブ取引

1. 取引の状況に関する事項

<p>前連結会計年度 (自 平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)</p>	<p>当連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)</p>
<p>(1) 取引の内容 利用しているデリバティブ取引は、為替予約取引であります。</p> <p>(2) 取引に対する取組方針 デリバティブ取引は、将来の為替の変動による為替リスク回避を目的としており、投機的な取引は行わない方針であります。</p> <p>(3) 取引の利用目的 デリバティブ取引は、外貨建金銭債務の為替変動リスクを回避し、安定的な利益の確保を図る目的で利用しております。 尚、デリバティブ取引を利用してヘッジ会計を行っております。</p> <p>①ヘッジ会計の方法 繰延ヘッジ処理によっております。 為替変動リスクのヘッジについては振当処理を採用しております。</p> <p>②ヘッジ手段とヘッジ対象 ヘッジ手段…為替予約 ヘッジ対象…外貨建て輸入取引</p> <p>③ヘッジ方針 外貨建ての輸入予定取引の為替変動リスクをヘッジするために、為替予約を利用することとし、ヘッジ手段である為替予約は、ヘッジ対象である外貨建ての輸入予定取引の範囲内で行うこととしております。</p> <p>④ヘッジ有効性の評価の方法 ヘッジ手段がヘッジ対象である予定取引の重要な条件と同一であり、ヘッジ開始時、及びその後も継続して相場変動を完全に相殺するものであると想定できるため、ヘッジの有効性の判定を省略しております。</p>	<p>(1) 取引の内容 利用しているデリバティブ取引は、通貨関連では為替予約取引、金利関連では金利スワップ取引であります。</p> <p>(2) 取引に対する取組方針 デリバティブ取引は、将来の為替・金利の変動によるリスク回避を目的としており、投機的な取引は行わない方針であります。</p> <p>(3) 取引の利用目的 デリバティブ取引は、通貨関連では外貨建金銭債務の為替変動リスクを回避し、安定的な利益の確保を図る目的で、また金利関連では借入金利等の将来の金利市場における利率上昇による為替変動リスクを回避する目的で利用しております。 尚、デリバティブ取引を利用してヘッジ会計を行っております。</p> <p>①ヘッジ会計の方法 繰延ヘッジ処理によっております。 為替変動リスクのヘッジについては振当処理を採用しております。 金利スワップについては、金融商品に係る会計基準に定める特例処理によっております。</p> <p>②ヘッジ手段とヘッジ対象 ヘッジ手段…為替予約、金利スワップ ヘッジ対象…外貨建て輸入取引、借入金</p> <p>③ヘッジ方針 外貨建ての輸入予定取引の為替変動リスクをヘッジするために為替予約を利用し、金利リスクの低減並びに金融収支改善のために金利スワップを利用することとし、ヘッジ手段である為替予約はヘッジ対象である外貨建ての輸入予定取引の範囲内、金利スワップはヘッジ対象である借入金の範囲内で行うこととしております。</p> <p>④ヘッジ有効性の評価の方法 為替予約については、ヘッジ手段がヘッジ対象である予定取引の重要な条件と同一であり、ヘッジ開始時、及びその後も継続して相場変動を完全に相殺するものであると想定できるため、ヘッジの有効性の判定を省略しております。 金利スワップについては、特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価は省略しております。</p>

<p style="text-align: center;">前連結会計年度 (自 平成15年 4月 1日 至 平成16年 3月31日)</p>	<p style="text-align: center;">当連結会計年度 (自 平成16年 4月 1日 至 平成17年 3月31日)</p>
<p>(4) 取引に係るリスクの内容  為替予約取引は、為替相場による変動のリスクを有しております。  なお、取引相手先は高格付けを有する金融機関に限定しているため信用リスクはほとんどないと認識しております。</p> <p>(5) 取引に係るリスク管理体制  デリバティブ取引の執行・管理については、取引権限及び取引限度額等を定めた社内ルールに従い、財務担当部門が決裁担当者の承認を得て行っております。</p>	<p>(4) 取引に係るリスクの内容  為替予約取引は、為替相場による変動のリスクを有しております。金利スワップ取引は市場金利の変動によるリスクを有しております。  なお、取引相手先は高格付けを有する金融機関に限定しているため信用リスクはほとんどないと認識しております。</p> <p>(5) 取引に係るリスク管理体制  同左</p>

2. 取引の時価等に関する事項

前連結会計年度（平成16年 3月31日現在）

該当事項はありません。

なお、為替予約取引を行っておりますが、期末残高はありません。

当連結会計年度（平成17年 3月31日現在）

該当事項はありません。

なお、為替予約取引を行っておりますが、期末残高はありません。

④ 退職給付

該当事項はありません。

⑤ 税効果会計

1. 繰延税金資産の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成16年3月31日)	当連結会計年度 (平成17年3月31日)
	(千円)	(千円)
繰延税金資産(流動)		
税務上の繰越欠損金	—	—
長期前払費用償却超過額	—	—
未払事業税	17,977	35,094
計	17,977	35,094
繰延税金資産(固定)		
連結会社間内部利益消去	94,384	185,335
計	94,384	185,335
評価性引当金	—	—
繰延税金資産の合計	112,362	220,429

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

前連結会計年度 (平成16年3月31日)

法定実効税率(当連結会計年度41.8%)と税効果会計適用後の法人税等の負担率(当連結会計年度40.8%)との差異(1.0%)が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

当連結会計年度 (平成17年3月31日)

	当連結会計年度 (平成17年3月31日)
	(%)
法定実効税率	41.0
(調整)	
欠損子会社の未認識税務利益	4.94
税務上の繰越決算金の利用	△1.32
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.40
住民税均等割	1.55
その他	△0.60
税効果会計適用後の法人税等の負担率	45.97

3. 法人税等の税率の変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

前連結会計年度 (平成16年3月31日)

「地方税法等の一部を改正する法律」(平成15年法律第9号)が平成15年3月31日に公布されたことに伴い、当連結会計年度の繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用した法定実効税率は、前連結会計年度の41.8%から41.0%に変更されました。

その結果、繰延税金資産の金額(繰延税金負債の金額を控除した金額)が2,192千円減少し、当連結会計年度に計上された法人税等調整額が2,192千円減少しております。

当連結会計年度 (平成17年3月31日)

該当事項はありません

⑥ セグメント情報

【事業の種類別セグメント情報】

前連結会計年度及び当連結会計年度において、当社グループは風力発電事業者として同一セグメントに属する風力発電機器の販売、風力発電による売電事業を行っており、当該事業以外に事業の種類がないため該当事項はありません。

【所在地別セグメント情報】

最近2連結会計年度の所在地別セグメント情報は、次のとおりであります。

前連結会計年度（自平成15年4月1日 至平成16年3月31日）

	日本（千円）	欧州（千円）	計（千円）	消去又は全社（千円）	連結（千円）
I. 売上高及び営業損益					
売上高					
(1) 外部顧客に対する売上高	4,809,842	62,282	4,872,124	—	4,872,124
(2) セグメント間の内部売上高又は振替高	—	—	—	—	—
計	4,809,842	62,282	4,872,124	—	4,872,124
営業費用	4,412,375	57,114	4,469,490	—	4,469,490
営業利益	397,466	5,167	402,634	—	402,634
II. 資産	12,766,219	706,351	13,472,571	△10,547	13,462,024

当連結会計年度（自平成16年4月1日 至平成17年3月31日）

	日本（千円）	欧州（千円）	計（千円）	消去又は全社（千円）	連結（千円）
I. 売上高及び営業損益					
売上高					
(1) 外部顧客に対する売上高	5,726,516	101,068	5,827,584	—	5,827,584
(2) セグメント間の内部売上高又は振替高	—	—	—	—	—
計	5,726,516	101,068	5,827,584	—	5,827,584
営業費用	4,972,294	125,263	5,097,557	—	5,097,557
営業利益	754,222	△24,194	730,027	—	730,027
II. 資産	18,551,267	1,127,614	19,678,882	△14,996	19,663,886

(注) 1. 国又は地域は地理的近接度により区分しております。

2. 本邦以外の区分に属する地域の内訳は次のとおりであります。

欧州・・・イギリス、ドイツ

【海外売上高】

前連結会計年度（自平成15年4月1日 至平成16年3月31日）及び当連結会計年度（自平成16年4月1日 至平成17年3月31日）

海外売上高は、いずれも連結売上高の10%未満であるため、記載を省略しております。

(注) 風力発電機の実売（所有権移転）場所は海外となりますが、販売先は本邦企業であることから、海外売上高に含めておりません。

⑦ 関連当事者との取引

前連結会計年度（自平成15年4月1日 至平成16年3月31日）

該当事項ありません。

当連結会計年度（自平成16年4月1日 至平成17年3月31日）

該当事項ありません。

（1株当たり情報）

前連結会計年度 （自平成15年4月1日 至平成16年3月31日）	当連結会計年度 （自平成16年4月1日 至平成17年3月31日）
1株当たり純資産額 48,493円55銭	1株当たり純資産額 72,650円73銭
1株当たり当期純利益 4,830円84銭	1株当たり当期純利益 3,092円34銭
潜在株式調整後1株当たり当期 純利益金額 4,777円27銭	潜在株式調整後1株当たり当期 純利益金額 3,030円27銭
<p>当社は、平成16年2月24日付で株式1株につき3株の株式分割を行っております。</p> <p>なお、当該株式分割が前期首に行われたと仮定した場合の前連結会計年度における1株当たり情報については、以下のとおりとなります。</p>	
1株当たり純資産額 23,317円70銭	
1株当たり当期純利益金額 1,605円75銭	
潜在株式調整後1株当たり当期 純利益金額 1,602円29銭	

（注） 1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 （自平成15年4月1日 至平成16年3月31日）	当連結会計年度 （自平成16年4月1日 至平成17年3月31日）
1株当たり当期純利益金額		
当期純利益（千円）	359,284	273,449
普通株主に帰属しない金額（千円）	—	—
普通株式に係る当期純利益（千円）	359,284	273,449
期中平均株式数（株）	74,373	88,428
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額		
当期純利益調整額（千円）	—	—
普通株式増加数（株）	834	1,811
（うち新株予約権）	(834)	(1,811)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要	平成15年6月23日付定時株主総会決議による商法第280条ノ20及び第280条ノ21の規定に基づく新株予約権の目的となる株式の数 900株	平成15年6月23日付定時株主総会決議による商法第280条ノ20及び第280条ノ21の規定に基づく新株予約権の目的となる株式の数 900株 平成16年6月28日付定時株主総会決議による商法第280条ノ20及び第280条ノ21の規定に基づく新株予約権の目的となる株式の数 1,000株

(重要な後発事象)

前連結会計年度（自平成15年4月1日 至平成16年3月31日）

平成16年5月17日開催の取締役会において、次のとおり子会社を設立することを決議し、平成16年5月24日に設立いたしました。

① 三浦ウィンドパーク(株)

- |           |                                 |
|-----------|---------------------------------|
| (1) 設立年月日 | 平成16年5月24日                      |
| (2) 資本金   | 10,000千円                        |
| (3) 所在地   | 神奈川県三浦市                         |
| (4) 事業内容  | 風力発電所開発、風力発電による売電事業、及び付帯する一切の業務 |
| (5) 出資比率  | 100%                            |

平成16年6月14日開催の取締役会において、次のとおり子会社を設立することを決議し、平成16年6月21日に設立いたしました。

② 大山ウィンドファーム(株)

- |           |                                 |
|-----------|---------------------------------|
| (1) 設立年月日 | 平成16年6月21日                      |
| (2) 資本金   | 10,000千円                        |
| (3) 所在地   | 鳥取県西伯郡大山町                       |
| (4) 事業内容  | 風力発電所開発、風力発電による売電事業、及び付帯する一切の業務 |
| (5) 出資比率  | 100%                            |

当連結会計年度（自平成16年4月1日 至平成17年3月31日）

該当事項はありません。

生産、受注及び販売の状況

当社では、当社グループの事業は単一セグメントを構成していると認識しており、事業の種類別セグメント情報は作成しておりませんので、以下においては品目別の実績を記載いたします。

(1) 商品仕入実績

第6期連結会計年度の商品仕入実績は、次のとおりであります。

品目	第6期連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)	
	金額	前年同期比 (%)
風力発電機の仕入 (千円)	3,942,151	104.9
合計	3,942,151	104.9

- (注) 1. 金額は仕入価格によっております。  
2. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 販売実績

第6期連結会計年度の販売実績は、次のとおりであります。

品目	第6期連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)	
	金額	前年同期比 (%)
風力発電機の販売 (千円)	4,814,730	108.7
風力発電による売電 (千円)	1,012,691	233.4
業務受託等 (千円)	162	1.6
合計	5,827,584	119.6

- (注) 1. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。  
2. 最近2連結会計年度における主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は以下のとおりであります。

相手先	第5期連結会計年度 (自 平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)		第6期連結会計年度 (自 平成16年4月1日 至 平成17年3月31日)	
	金額 (千円)	割合 (%)	金額 (千円)	割合 (%)
(株) 西島製作所	3,358,668	68.9	2,095,880	36.0
岡谷鋼機 (株)	—	—	1,397,000	23.9
(株) 関電工	494,671	10.1	1,115,500	19.1
東北電力 (株)	300,827	6.1	670,073	11.5